南北

太平記圖會

三編

肆

へ御10
1989
17

19
1989
17

南北太平記圖會卷十五上

三編

目錄

山門拒園城寺戒檀
賴豪墳死讐敵岳
顕家上洛破路次敵
定禪堅備戰官軍
義貞四天王顕怪力
黨官軍山徒燒三井
義貞進軍入京都
義貞正成談機密計
奇兵計義貞破足利兵

門鶴巻

尊氏敗軍走丹波路
定禅智撃義貞油断
名和楠救義貞破定禅
官軍三将取闇寄京都
神楽岡全村放手突箭

宮城縣図書館

南北太平記圖會卷之十五上

三編

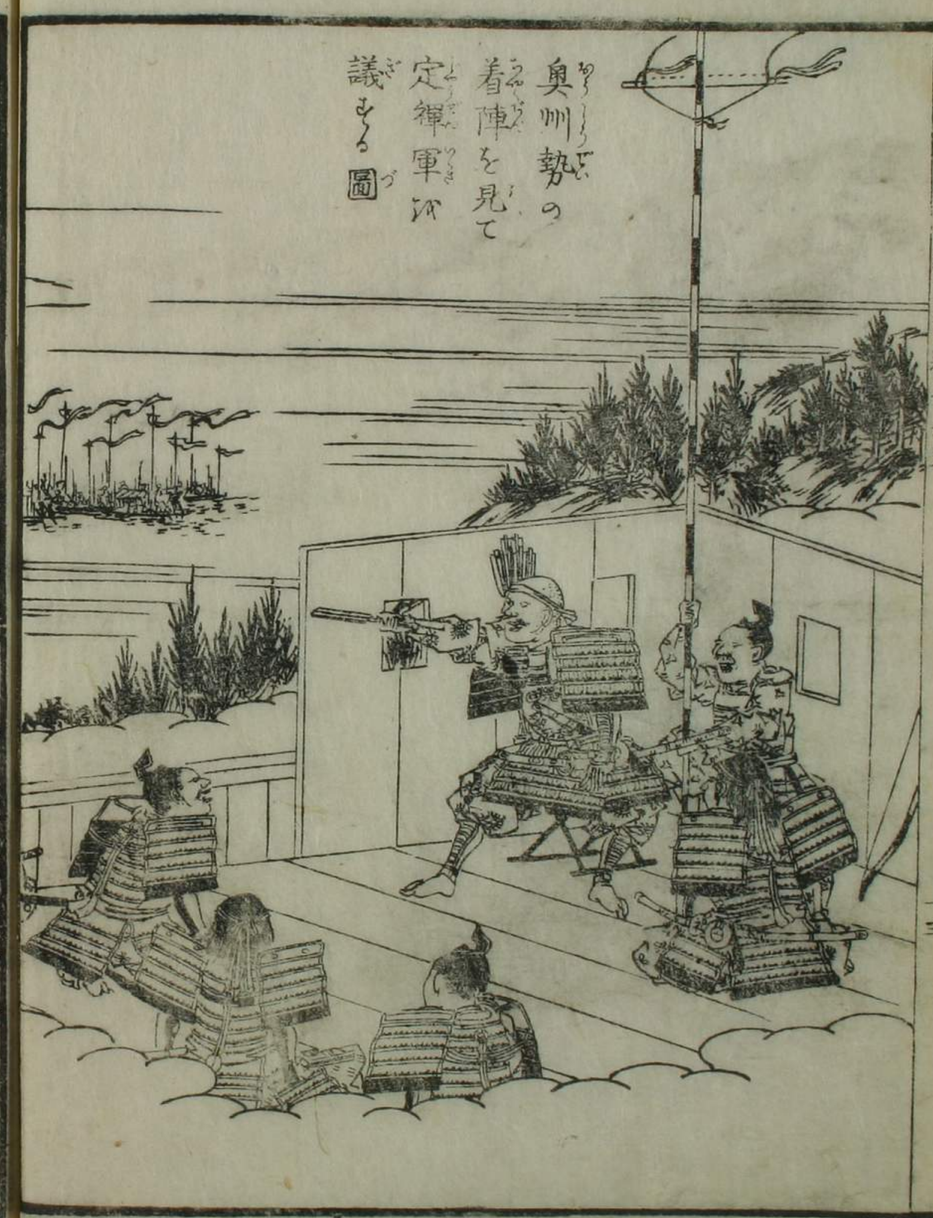
山門拒園城寺戒壇　賴豪憤死讐敵岳

さるほど主上山門に臨幸まします。山の衆徒等二心なく守護し奉て北國奥羽の勢を相待よう用ゑ[illegible]ば義貞よ勢の着ぬ先よいそぎ東坂本を可被責とて。細川卿律師定禅同刑部少輔陸奥守を大将として。六萬餘騎を三井寺へ差遣はさる。是は古より山門よ敵をる寺るれば。衆徒の所存よも二心はあらじと被憑る故なり。隨て衆徒忠節を致さるゝべ。戒壇造営の事武家殊よ加力可成其功のよう。被成御教書けふ。抑園城寺の三摩耶戒壇の支は前く已よ公家尊崇の義を以て勅裁を被成又関東貞の威を添て取立しうども山門嗷訴を恐まして猛威を振ふあいだ。干戈是よう動き回禄度くよ及べり。其故を如何まとた

づかるゝ此寺の開山圓珎智證大師と申奉る。最初敵山傳教大師の二世義真僧都の御弟子ゆえ顕密両宗の碩徳知行兼備の權者まそぐ御座しける。而るに傳教大師の御入滅の後智證大師の御弟子と慈覚大師の御弟子と聊法論の事有て忽ち確執ふ及び ゝる間智證大師の門徒修禅三百坊引て三井寺へ移る。于時教待和尚百六十年行て祈出し給ひし生身の弥勒菩薩を智證大師へ付属しまゝる。大師是を受て三密瑜伽の道場を構へ一代説教の法席を展給ふ。其後仁壽三年に智證大師求法の為に御渡唐あり ゝるに悪風俄に吹来て海上の御船忽ち覆らんと迷時大師舷に立出て十方を一礼して誠精を致させ給ひ ゝれば佛法護持の不動明王金色の身相を現して船の舳に立給へば新羅大明神まのあたり船の舳に化現して自ら橈を取給ふ。依て御船恙なく明州の津に着給ふ。御在唐七ヶ年の間寝食を忘て顕密の奥義を究めゝひて天安三年に御帰朝ありゝ。其後法流弥盛んにして一朝の綱領四海の倚頼なり。此寺の四ヶの大寺の其一つとして綸場の公請に随ひ宝祚の護持を致す事緒寺に卓拳せり。抑山門已に菩薩の大乗戒を建南都又聲聞の小乗戒を立ゝ園城寺何ぞ真言の三摩耶戒を建ざらんやとて。後朱雀院の御宇長暦年中三井寺の明尊僧正頻りに勅許を蒙んと奏聞せられを。山門かゝ支え申ければ彼寺の本主大政大臣大友皇子の後胤大友夜須磨呂の氏族連暑して官府を申ス。貞觀六年十二月五日の状曰望請長為延暦寺別院以件圓珎作二主持之人早垂恩恤以園城寺如解状可為延暦寺別院之由被下寺牒將俾慰夜須磨呂羌氏人愁吟弥為天台別院專祈天長地久之御願可致四海八埏之恭平云々仍貞觀八年五月十四日官符被成下曰以園城寺可為天台別院云々加之貞觀九

年十月三日智證大師宛文云圓珍之門弟不可受南都小乗劣戒必於大乗戒壇院可受菩薩別解脱戒云〻然へ本末の號暦然〻師弟の義何ぞ同ぜん〻證を引理を立て文へ申る間君思召煩へさせのひて許否ともあ凡慮の及ぶ〻こと〻て非ぶべ只冥慮よ可任とて自告文を被遊て叡山の根本中堂よ奄らるる〻。其詞ふ云戒壇立而可無國家之危者悟其吉歸戒壇立而可有王者之懼者施其尓現云〻此告文を籠らるて七日よ當日の夜主上不思議の御夢想あり〻。無動寺の慶命僧正一紙の消息を進〻せて曰自胎内之昔至治天之今忝雖奉祈請宝祚長久三井寺戒壇院若被宣下者可失本懐云〻又その翌夜の御夢よ彼慶命僧正奏内して紫宸殿ふ立れ〻り〻ゲ大よ怒まる氣色まて昨日一紙の状を雖進覧叡慮更ふ驚給ぬ〻所経三井寺の戒壇有勅許者爰年来の御祈忽ちよ可成怨心と宣ふ又其次の夜の御夢よ一人の老翁弓箭を帯して殿上よ候を主上汝は何ものぞと御尋あり〻るに圓宗擁護の赤山大明神まそ三井寺の戒壇執奏の人ふ向て矢ゐ仕ん〻めよ糸内しそいとそ宣ひ〻る。夜〻の御夢想よ君も神の恐を成まろれば寺門の所望黙止さん山門よ道理をそ付らるる〻。角て遂よ程経て白川院の御字よ江の師匡房の兄よ三井寺の頼豪僧都とて貴き僧あり〻を被召て皇子御誕生の御祈りをそ仰付らるる〻。頼豪勅を奉て肝膽を砕く祈請〻〻の霊験忽ちよ顕まそ。承保元年十二月十六日よ皇子御誕生あり〻帝叡感の余そ御祈の勧賞宜依請と被宣下頼豪年来の所望く〻べ他の官禄一句是を閣て園城寺の三摩耶戒壇造立の勅許をそ願まる〻。山門又こ〻を聞て歎状を捧て禁庭よ訴へ先例を引て停廃せ〻まる奏〻〻ぜ〻ども綸言再び不復とて勅許なく〻べ三塔嗷儀を以て各〻

奥州勢の着陣を見て定禅軍沙議する圖



講演をうち止め社〳〵の門戸を閉ぢ御願を止め〻る間。朝義難黙止力なくして三摩耶戒壇造立の勅許をぞ召えされ〻る。頼豪是を怒て百日の間髪をも剃ず爪をも不切爐壇の灰よりもぼり嗔恚の火に骨を焦して我願は即身に大魔縁と成て。玉體を悩し奉て山門の佛法を滅さんと云ふ悪念を発起して。遂に三七日が中に壇上にして死にける其怨霊果して邪毒を吐て頼豪いのり出し奉し皇子未だ母どの御膝の上をとなりもせぬに。怒に御隠を沸はしり叡襟に依て堪ず。山門の嗷訴園城の効験得失をもあらそはき叡隠を無りけるべ山門の恥を雪ぎ又も継體の儲をまうけさせん為に。延暦寺の座主良信大僧正を申請じて皇子御誕生の御祈りをぞ致されける。先御修法の間種〻の奇端あつて承暦三年七月九日皇子御誕生あり山門の護持隙なりけるべ。頼豪が怨霊も近付こそまつ

ざりけるべ。此宮遂に王體を具して天子の御位を践せ給へ御在位の後院號有て堀川院と申奉りしに則此第二の宮の御てなり。其後頼豪が怨霊怒に怒て鉄の牙石の身なる八万四千の鼠と成て。比叡山に上り佛像経巻を噛破りなる是を防ぐに無術して頼豪を。一社の神に崇めく甚怨念を鎮む鼠の禿倉是なり。かゝる後三井寺弥意趣深くして動もすれば戒壇の事を申達せんと。山門もまた以前の嗷訴を例として理不盡にあるを欲徹却と去べ始承暦年中より去る文保元年に至るまで此戒壇院に園城寺の焼る支已に七ヶ度に近年は是よりして其企も無をるべ中〻主門繁昌して三室の住持も全なりつるに。今将軍安に衆徒の心を永く為に山門の怒りをも不顧麁忽に却教書を為さるべ天魔の所行法滅の因緑なると聞人毎に唇を翻して評に曰佛は戒を説に人夏一人の為にあらず衆生の為なり何ぞ

せめぐ〳〵く山門獨り戒壇を立て三井寺の戒壇を立ゝ毋じと云や平等の慈悲や背きさるん三井寺よ不限如何ろう所にたりとる戒壇と立んよ何の悪しき事ろうんや最善事そそ有べ〳〵善支よ障ろを以て覺と然ばゝ山門の法師の意いとく魔の入替りたりよや三井寺の衆徒此戒壇故よ寺を燒燒事數度ろう何ぞ必を〳〵戒壇と不立〳〵支不成と云事やある。かく山門の衆徒悪心と発〳〵三井寺を燒拂ふ程の事ろ人ゆゝ不立とも可有事ろるふ不被謂邪戒を知〳〵て毎度寺を被燒愚痴の致を所ろう僧い支を離て無所着無為の理よ入なん事ゝそ可嗜とろるよ戒壇を立んと云。立させじと云争論て寺院を燒失せる両寺の衆徒心の内ゝそ知ら泊ろ〳〵内ゝ佛智よ背き外ゝ破戒の比丘とる可謂なう尊氏是を便り

とゝて三井寺の衆徒をそ定禅を被遣しゝ善縁ろるゝ

頭家上洛破路次敵

去年十一月よ新田左兵衛督義貞朝臣打手の大将を承て関東へ下向せら〳〵時奥州の國司北畠中納言顕家卿の方へ相図の時を遠へど可攻合由綸旨を被下たりろ。顕家卿ハ奥州の府よ御在〳〵ゲ十月十日綸旨を到来し驚さて軍勢を國中よ催されゝども雪深ゝゝ參ろ勢なゝ是非なゝ傍り迫き所の兵小〳〵召具して十二月九二日よ府を立めゝよ常〳〵なゝゞ三日ゝ可行を雪深ふゝて人馬通らぢゝ同九八日岩崎よ着めゝ爰より雪尤ゝ降ざりしゝ相馬常陸の軍勢馳加ろう八千餘騎ゝて三箇原へ出ゝ人ゝ佐竹の者ども国司を不通とて四千餘騎ゝて古沢野へ打出ゝろゝ相馬南部の者ども一矢とる射させど拔つゝて懸りゝゝゝ佐竹ゝ負て大勢紂ゝて引退く。夫より下

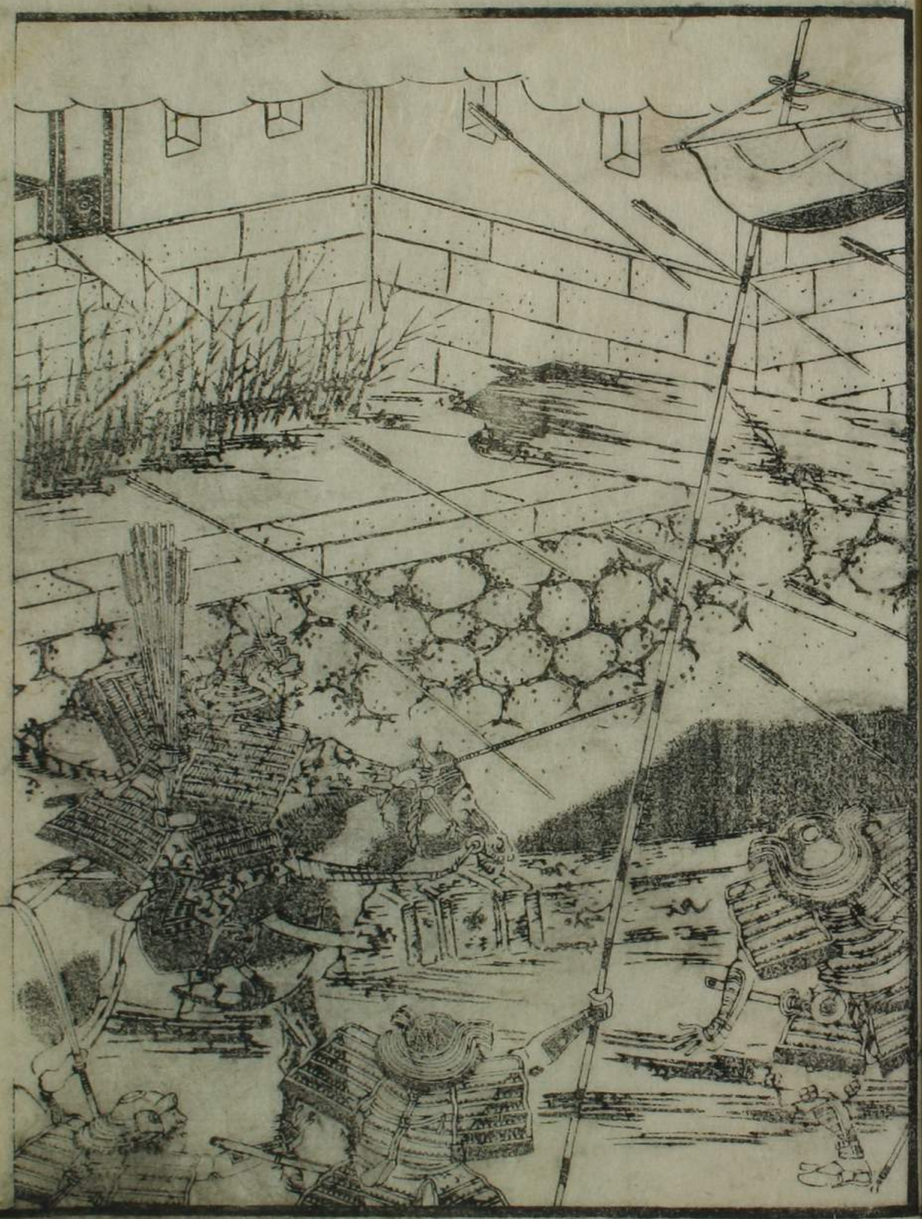
定禅堅備戦官軍

野へ出て足利ヨ發向して尊氏ガ一族共を誅し八百餘の首を取てけり。
是より伊達信夫金沢大澤赤生津由利鳥ノ海大山最上の者ども
結城宇都宮ガ勢馳着て三万餘騎ヨ成ル。鎌倉へ攻入ントヨ尊氏の
子息千壽王殿紀五郎左衛門荒川七郎都築新吾今川大高等二萬
餘騎ヨて堅ク〳〵を打破り首を取支一千餘ヲ。されとも相模竹の
下の軍ヨ官軍打負義貞ハ都へ帰り尊氏兄弟引續キて上洛せ〳〵と
聞へけるヨ跡より追てこそ上ントて十二月九八日夜を日ヲ継でぞ上
洛せ〳〵る。依之越後上野常陸下野ヨ殘ル新田の一族共ヨ千
葉宇都宮ガ手勢ども是を聞傳て此彼より馳加リ来る間其勢無程
五萬餘騎ヨ成ル。遥倉より西ハ手差者も無リケレバ夜晝
馬を早めて正月十二日近江の愛知川の宿ヨつヨ〳〵。其日大館中務
大輔佐〻木判官氏頼其ころいまだ幼稚ヨて揖龍ル〳〵る観音寺の
城郭を責落して敵を対事都て五百余人翌日早馬を以て事のよ〳〵と
坂本へ申上ケるとて〳〵ル。主上を始め奉り敗軍の士卒悉く悦を為
し志を翻して〳〵ると云ども則道場坊の助註紀祐覚ヨ彼
仰付湖上の船七百余艘を默て志那の濱まで顕家卿を向へ一日ガ中
ニ渡ら〳〵る。顕家軍勢ヨ配分をべき粮ヲ正成六千八百石の米
の内二千石大豆千石を奈ら〳〵せたり。又観音寺の城ヨ糧あり船ヨて
是と運ひ取ル〳〵とて。去年楠近江へ發向して民屋を追捕し国中の米
穀を奪ひ〳〵時戦んと思ふヨ軍勢ヲ〳〵是國中ヨ一城のヲキガ故ヲ
て尊氏道誉ヨ仰て俄ヨ構へ〳〵る城ヲ。城中の勢二千人有〳〵と〳〵る。
宇都宮紀清両黨の者催促ヨ〳〵ル。五百餘騎打連〳〵ル〳〵宇都
宮公綱ハ将軍方ヨ在と聞へ面くヨ暇を請色代して志那の濱ヨ
引今ヨ一口を廻て京都へ上ル〳〵。去程ヨ東國の勢已ヨ東坂本ヨ

着けまゐ顕家卿義貞朝臣宗徒の輩聖女の彼岸所よ會合して。合戦の評定あり何様一両日ハ馬の足を休めてこそ京都へハ寄ゑと顕家卿宣ひけるを大舘左馬助彼申けるハ長途よ疲まてる馬を一日も休めはぐ中く血下て四五日も物の用よ立べくもなき其上へ坂本へ着こうと敵縦ひ聞及ぶとも頓て可寄とハよもと思寄はゞ軍ハ不意よ起せば必ず敵を拉ぐ習こ只夜の内よ志賀辛崎の邊まで打寄て未明よ三井寺へ押寄四方よりの時を作て責入程なゝば御方治定の勝軍とこそ存ゑと申されけるを義貞朝臣も捕判官も此儀誠よ可然いと被同けるを先陣ハ誰なるべんと議しけるに顕家卿荒手まて侍まゐ某仕らんとあり。義貞ハ今度の惣大将ハ我まてこそ在らんずるよ顕家早我下知を不受先陣と宣ふ事心得ぬと思ふと長途よ疲まてる御勢なり。後陣よ引へ〻某ゞ手の者よ大舘額田羽川等よ申付侍りなんと謂まゐふ顕家卿ハ何心なくいざとよ新田殿へ數日の軍よ疲まてあひなん今度上りたる軍勢も疲まてるとハ申なゞら左程ハ侍るまじ新手まて侍まゐ某先陣と宣ふよ義貞猶心解ぬしていやく某先陣と被申けるを顕家卿新田ゞ謂ふ心へぬ物ゝと被思けるとも左らぬ体まて扱ハ兎も角もと宣ひて結城上野入道伊達正弘信夫盛平新田ゞ物の謂様常よ変て耳よ立とや思ひけん暫私語申けるハ國司の御支ハ新手まて侍まゐ先陣を成されいく今度も數度の戦よ我等一度も不覚なく御勢も不足ハ有間敷ぞ人よ無せぬ軍ハ仕らぬと間敷ゑても待らぬと結城入道申けるを伊達信夫も最ゑて以今度先陣をゝ穴賢人よ渡させ給ふなとぞ申ける。義貞是を聞て明日の軍ハ先指延べの人重て評定と加へ後日よこそと宣ひ紛何内判官申けるハ大敵を前よ置なゞらの名将達の先陣を争ふて軍の勝べき図を脱さんと仕ゆこそ。物憂く顕家卿の大勢まて着給ひ

殊ニ観音寺の城を責落しかゝるべき三井寺の敵どもハ今夜明日ハ
間をゝ〻して臆病神ハ離れぬべし。今夜も寄せ度支ニ侍ヨども諸国の
軍勢殊ニ山門の衆徒在を事なれバ同士討を恐る処ニあり明日三井
寺の敵を追落さゞ後日を期さゞ敵の臆病覚て構を厳〻く仕りな
んぞる条疑なし。其忍の兵と入てゆゝしふ彼が申ハも三井寺の敵尊氏
ハ加勢を乞ふよゝ申ハ実ニ左こそ候ひなん尊氏兄弟が軍立延〻敷
ゝべ明日ニハ評定ハ済まゞ〻ゝ京都ハその見参人又高上杉細川の後
ろの者ども京都近き里〻の遊び者手の者どもの兵粮なんど鬼角ハ
事を寄尊氏が宿所へ参る間敷ゝべ明後日ニハ治定大勢三井寺
ニ着なん左ハそいで由〻敷大事ハそ侍うんぞるぞ頭家の卿の宣ふ
処ニ謂ヨあり義貞の仰も謂ヨあり強く過て被仰ハ共ニ非なり頭
家卿先陣と被仰なゝべ義貞ハ後陣ニ御ひゝくハ是非とも義貞先陣
と被仰侍らゝべ頭家重〻敷後ハ御扣へハ得斯不謂事宣ふハ忠とや
申さゝんと理を細ニ申ゝ。頭家卿摘判官の被申所実ハも其理なり
義貞先陣ニ在らヨゝとゝ。義貞ハ鬼も角も謂ヨてゝゝるを結城入
道人の事ハ知らゞ今上りたる身の人ニ先陣をゝ渡をまゞ〻ハそ侍ると
申ニ摘又申されゝハ頭家卿ハ只今上り給ゝる先陣ニ被進ゝべとゝ。
義助も申さヨゝハ正成の子ハ最ハ只頭家卿の先陣こそ可然と在
るに義貞も実ハとや被思ゝん頭家卿を先陣とゝ定らヨける。大館額
田羽川の者ども人ニ先をせられ間敷ゝとて夜半ニ坂本を立て千葉の
新助ハ頭家卿の手ハそハ大名なり。我ハ先陣を給りゝと申ゝるしも
兎して〻ゝ。新田の人〻ニ先を為〻ヨ間敷と宵より千余騎ハて志
賀の濱ニ陣を取て居ゝるゝと大館羽川の人〻千葉が陣と打て通ん
と仕ゝるを千葉助恐なゞ〻通を間敷ゝのとて。己ニ同士軍せんと仕け

ろと正成是と聞付只一騎かけ来て種〻みなぐめて支なく済しぬ。又山門の衆徒ハ君の御大事此時よ侍まぶ。兎も角も楠殿の仰よ随ひて軍仕ふべんよ悪き御手ひハよも在らじと申。依之楠帽子ろ法師達ハ大略歩立たろ。案内者ろまぶ山路を敵の後へ廻りくと下知し。地下人等ハ舟ろて湖上よ浮び渚ちろく押寄て横矢を射らまいく。軍場の地狭く敷して左迫の大勢ハ入らぞと申ろまぶ皆是よ同じてろまぶ頓て緒大将ぞ鬮ろ。大館左馬助額田羽川六千餘騎ろて夜半よ坂本と立て唐崎の濱よ陣をとろ。戸津比叡辻和尓堅田のの共ハ小舟七百艘よ取乗て澳よ浮で明るを待。山門の大衆ハ二万余人大略徒立ろりろまぶ如意越と搦手よ廻り岡の聲を揚べ同時ふ落し合んと鳴を静めて待明も去程ふ坂本よ大勢の着ろ形勢舟の往返よ見えて震しろけまぶ。三井寺の大将細川卿律師定禅。高大和守ぐ方より京都へ使を馳く東国の勢坂本よ着て明日可寄ろ其聞えい急ぎ御勢を添りく と三度まぐ申ろろまぶ。関東より何勢ぐ夫程海で多くハ上ろべきぞ。勢ハ大畧宇都宮ぞ京よ在と聞えたぶ頓て主の許へぞ馳来らんとぞ。将軍事ともしのハぞ三井寺へハ軍勢一騎も添らまぎろろ。定禅ハ尊氏より加勢ハ下るぞ謀を以て戦ろんと三井寺ハ宗徒の兵六千餘騎籠置。寺より海端まで鹿垣を強付。我身ハ大津松本れ宿の山乃上山〻ふ陣を取て敵の寄ろを待居ろ。官軍ハかろる謀あるとハ夢よも不知。先一番よ千葉新助千餘騎。二番ハ結城上野入道道忠伊達信夫の兵等六千余騎是等の勢皆一手よ成て先陣を給りたりまぶ。共千葉人より先ぬと早ぎろるに依て二陣ぬハ成ろりける。顕家卿二萬余騎軍を七ろ分て進ろ。四番ハ大館額田羽川六千余騎軍を三ッよ分たろ。五番新田義貞三万余騎軍を分る事十



新田の四天王怪力を顕はして三井寺の惣門を破る圖

三。六番は楠判官正成名和伯耆守長年。千種中将忠顕五千余騎軍を三つよ分くゝり。千葉新助は後陣の續らざる前よ囲をゝし垣を押破て先大津の宿よ火をかけて三井寺へ直よ懸入らんとを兼て用意しゝる事なるべ。三井寺の勢両院の坂口ゟて戦ふよ定禅坂東坂西の者どもを先よ立赤松兄弟を二陣よ立て横合よかゝるゝ。新助前後をつまゝ獅子奮迅の怒りをなすとゆども。支叶ねどもしてもも討死従卒も残り少なよ討なゝり。定禅手合の軍に打勝て霄より用意した る垣を前よあて陣をとる。頭家卿二万余騎まぐ昧爽き明方なれば前よ垣有とも知りのなど。敵大勢なればとや思なゝん七ッよ分くる二万餘騎を一手よ成て。静くと懸りのひける三井寺の勢ども垣の内より雨のふるごとくよ射くゝるなれば思ひもよらぬ大勢よ射て引退く所よ結城上野入道伊達信夫のりのどる口惜き事よ思ひ取てゝ垣を破らんとくゝる處と赤松兄弟二千餘騎まて参合せて戦ひけるに立わ心なく打乱て引退く定禅二万余騎まて垣を押破り半ば軍の備を乱し半は備を堅くして結て出らるゝ官軍多く討てゝり義貞もは今日の軍ゟは勝くゝるぞとて備を乱さぬ太鼓を撃て被進けるに阿波の小笠原二千余騎まて備を堅して進を来る義貞の先陣羽川等の人く渡り合て。暫く戦ひ小笠原は勢を打崩を義貞いよく備を堅ふして進ゝるゝ前よ員色よ見へくゝる奥ゟ勢結城入道と始として一統よ取て返し敵の中へ懸入命をも惜ぬ相戦ふ定禅は垣の内まて戦んと返合くせくゝるゝ。乱て引くゝる大勢なれば返さぬして皆寺門の内へ逃入ゝり額田。堀口。江田。大館。七百餘騎まて逃る敵よ追をゝふて城の中へ入らんとしゝる処よ。三井の衆徒五百餘人開の口よ下り塞で命をもて防ぎゝるべ。寄手の勢百餘人討ゝる其間城中より木戸を下し

て城の橋を引たりけるこそ如何ともせざき様なく責あぐんでぞ見へよけれ

義貞四天王顯怪力　黨官軍山徒燒寺門

新田の人々一戦よ敵を城中へ追入しぐ敵又橋を引くるこそ詮方なく皆くぶめて居たりける服屋左衛門佐義助心をいたし無云甲斐者ども哉。僅の木戸一ツよ支て是程の小城を責落さんと云支やある栗生條塚へ無ろあの木戸早く打破て畑亘理へ無ら切て入とぞ下知せられる。是を聞て栗生條塚馬より飛下り木戸を引破らんと走り寄て見るべ。堀のまへよ深さ二丈餘りの堀有て両方の岸堀凡を立たる如くなる。橋をぞ皆刈迎へて橋桁外りぞ立たる。二人の勇士如何して可渡と左右をきろと見る処よ傍なる塚の上よ面三尺斗を有て長さ五六丈も有らんと覚へたる。大卒都婆二本あり是こそ究竟の橋板おぎんなるまと両人走り寄て小脇よ挾て抜く。土の底五六尺堀入たる大木なれば傍の土一二尺ゞ程ぐへつと崩れて。卒都婆へ念なく抜よりて即両人二本の卒都婆を軽くと打くげ。堀の端よ突立て先廣言をぞ吐たりける。異國よへ烏獲樊噲。吾朝よへ和泉親衡朝比奈義秀是等皆世ふ双びなき大力とへ聞ゆれども我等ゞ力よ幾程ゞ増るべき云所傍若無人なりと思へん人へ力の程を御覧ぜよとて儘よ二本の卒都婆を同じ様よ向ひの岸へぞ倒懸たりける卒都婆の面平なふして二本相なくべこそ。四条五條の橋の如く是を見畑亘理の二人へ此橋を越て手柄をせべしと戯れて。二人共よ橋の上をさらくと走り渡り。堀の上なる逆茂木取て引退れば栗生條塚も走り渡て各木戸の脇よぞ着たりける。是を防ぐんとする兵ども三方の土矢間ゟ

長刀をひ〳〵めき散〳〵に突こうるを直理新左衛門十六本まで引奪ふて〻捨〳〵にする。是を見て畑六郎左衛門のけや直理其場引破て心安く人〳〵に軍をさせんと云ふ〻に走り懸て。右の足を上木戸の関の木の辺を二踊三踊ぞ踊ぶる。余に強く被踊て二筋渡せる八九すの関の木中より折て木戸の扉も屍柱も同じくどうと倒れけれ防んとする兵五百余人四方へ散て逃とひく一の木戸已に破れけれ新田の三万余騎城の中へ乗入て先ツ合図の火をぞ揚こうる。此火を見るより山門の大衆二万余人如意越より落合て。即ち院〻谷〻へ乱れ入堂社仏閣に火を懸て喚き呼んで責こうる。猛火東西より吹ふけて敵南北に充満これば。今は叶ふまじとや思ひけん三井寺の衆徒或は金堂に走入て猛火の中に腹を切て臥或は聖教を抱て幽谷に倒れ薄ぶ。多年止住の案内者実も時に取てハ行方を失ふ況や四国西國の兵ども方角も弁ずぞ煙の中に目をも不見上迷ひ惑ふべ只此彼の木の下岩の陰に疲まて自害をするより外の事ハあらじ。されば半日余りの戦ひに大律松本三井寺の内に対する敵を数ふるに七千三百余人なり。抑金堂の本尊ハ生身の弥勒まで渡らせ給へば角てハ如何とて。或衆徒御首ぐるりと取て薮の中に隠し置こうるが。多く被討る兵の首共の中に交りて切目に血の付こうるを見て。山法師や寄こうけん大札を建て一首の狂哥に添書をぞ〻こうる。其詰に曰建武二の春のころ何とやらん事の騒しき様聞へ侍りしぞ。弥勒仏や三會の暁に成ぬるなんのでさるべ八相成道して統法利生せんと思ひて金堂を立出たまへば業火盛んに燃て修羅の闘諍四方に聞ゆ。コハ何どうと思ひ分く方も無て居こうるに仏地坊の某とかんぬせ者堂内へ走り入て所以もなく据を以て我首を切こうる阿逸多とのへども不叶堪

無くして悲の中より思ひ沈みけ侍り〜

山をとぶ鶴といふに思ひ合せ侍りし

此前く少し上の時分寺門の衆徒是を一大事と取のけ申々九乳の鳧鐘も取る人なかりきに空〜〜焼て地へ落ぬ。此鐘と申は昔龍宮城より俵藤太秀郷とのゝ者傳へ来る鐘とぞ。其故を尋るに義平のあろ此秀郷只一人勢田の橋を渡り給ふ長二十丈引りる。大蛇橋の上に横て伏たり。両の眼は耀て天に二つの日を掛たるが如く。双べたる角尖て冬枯の森の梢に不異。織の牙上下に生連ひ紅の舌炎を吐くと怪まる。若尋常の人ならば目もくれ気もきえて即ち地に倒るべきに。秀郷は天下第一の剛の者なれば更に一念も不動〜〜。彼大蛇の背を荒らかに踏で静かに上とぞ越られ。然れども大蛇敢て驚かず秀郷を後を不顧して遥に行隔りける処に。怪げなる小男一人忽然として秀郷が前に来りて云ける。我此橋の下に来て住事既に二千餘年なり。貴賤往来の人を量るに御辺程の大剛なる人をいまだ見ず。我二年已来地を争ふ敵ありて動もすれば彼が為に被悩可然御辺我敵を討てたびらへと懇に宣へば。秀郷一義に及ぶ子細有まじと領伏して則ち彼化人を先に立て又勢田の方へぞ帰りける。二人ともに波を分て水中に入事五十余町有て一つの楼門あり。閑て内へ入るに瑠璃の沙厚く玉の甃映て落花自ら繽紛たり。朱樓紫殿王欄干金を鐺に銀を柱とせり。其壮観奇麗未曾て目にも見ず耳にも聞ざりし所なり。此怪げなりつる男先に内へ入て須更の間衣冠を正して出迎へ秀郷を客位に請ぜ左右侍衛の官前後花の粧善盡美を盡せり。酒宴数刻に及んで夜已に深けぬれば敵の可寄程にも成ぬと周障騒ぐ。秀郷は常に身を不放持さ

り々る五人張よせき絃うけて噛濕し三年竹の節近ちるを十五束三伏よ拵らへく。簇の中子を筈本まで打とをうしふしくる矢只三筋と手挟こて。今やくとそ待こうる々夜半過る程よ雨風一通り過て雷火の激をる事隙なり。暫く有て三上の高峯の方より焼松二三千ゞ程二行ふ燃て。中ふ嶋の如くるるもの此龍宮城を指てぞ近付々。事の体をよくく見るに二行よ燈せる焼明ハ皆己ゞ左右の手よもぎ〳〵こうと見へこう。あるは是ハ数千年を経こる大百足蚿の化こうとと心得く矢頃近く成々まゞ件の五人張よ十五束三ツ伏忘るゝ弓引ちがうて。眉間の真中とぞ射こう々其手答矢を射るやうよ聞えて筈を返してぞ不立々。秀郷一の矢を射損じて不安思ひ々まゞ二の矢を番ひて一分も不違熊と前の矢所をぞ射こう々此矢も亦前のごくよ躍り返て身よ不立々まゞ秀郷二の矢をも射損じて憑む所ハ矢一筋なり。如何ハせんと思ひ々るゞ屹と案ゞ出こたるこ有て此度射んとこ々る矢先よ唾を吐うけて又ゞ矢所をぞ射こう々此矢よ忌る唾と塗こる故ゆやこう々ん。又ゞ矢所ハ三度迫射こる故ゆやこう々ん又秀郷ゞ英雄の念力凝たる故ゆや有々ん。此矢眉間のたゞ中を徹りて喉の下まで羽ぶくら責てぞ立こう々。二三千よ見へつる焼松も光り忽ちよ消て嶋の如くよ有つるもの倒るゝ音天地を響ゝせり立寄て是を見るふ果して百足の蜈蚣ゝり龍神ハこまを悦で。秀郷を様くりてゝ々るふ太刀一振。巻結一ツ。鎧一領頸結こる俵一ツ。赤胴の撞撞一ツを与へく御辺の門葉よ必ず将軍よなる人多々るべくとぞ示〳〵々。秀郷都ふ帰て此結を切てつるふよさらふ盡る支なり。俵ハ中ゝる入物をとまどもく盡ざう々る間財宝藏よ満て衣裳身ふ余まり。故よ其名を俵藤太とハ申々る。是ハ

産業の財なるべとて倉廩に収む撞へ梵砌の物なるべとて三井寺へおくりを奉る。文宝二年三井寺を上の時此撞を山門へ取寄て朝夕是を撞けるに敢てをとも鳴ざりける間山法師ども悪し其気なるべ鳴やうよ撞とて撞木を大きに拵らく。二三十人立懸りて破るとぞ撞さりける其時海鯨の吼る如き声を出して三井寺へゆゆと鳴こりける。山法師ども悪しとて無動寺の上より転して数千丈高き岩の上をはるばるした り々る間此撞微塵に砕けよ々り今は何の用にか可立とて其破るを取集めて本寺へぞ送りける。或時一尺ばかりなる小蛇来て此撞を居を以て扣きたりけるに一夜の内に又本の撞に成て疵付る所一ツも無りけりされば今に至るまで三井寺に在て此撞の声を聞人無明長夜の夢を驚こして慈尊出世の暁を待つ末代の不思議奇特の哀どもこ

義貞進軍入京都

義貞正成談機密計

さる程に官軍三井寺の敵を無事故責落こりける長途に疲たる人馬一両日機を扶けてこそ又合戦をも致さばやとて頸家卿坂本へ引こうさまこれば其勢二万余騎に仰に相順ふ新田左兵衛督も同じく坂本へ帰らんとせこまるるに船田長門守経正馬を叮へく申ろうに軍の利勝に乗る時北るを追ふより外の術はあらじと存は此合戦に被打漏て馬物具を脱で命ばかりを助かんと落行敵を追うけて京中へ押寄る程なくば臆病神の付こる大勢に被引立自餘の敵も定て機を失なるべこさる程なるに官軍敵の中へ紛れ入て勢の多少を敵に見せじとて此に火をかけ彼に時をつくりて縦横無礙に懸立るこのなるべこ尊氏兄弟の間に近付て勝負を仕るべきに落行に敵よりも幾程も隔り給ぬ何様一追々懸て見ばやと申ける。義貞云我も其義を思ひいるに所にいまこそ申こるべ頓て追懸よとて又旗の手を下して

義貞の
奇兵
尊氏ぐ
軍を
砕く圖

馬を進めまゐらせ新田の一族五千餘人其勢二万餘騎走る馬に鞭を打てぞ追ひける敵は今は遥に阻こうめんと覚ゆる程なれども逃る大勢あて逮く追ふ小勢也て早かりまゐ山科辺迄て忽ち敵に追付ぬ由良長濱吉江高橋真先に進んで追ぬ大敵をば不可欺とて廣き所にて敵の返し合つるき所までは不追して遠矢を射ける間を待くる手にて静〳〵と是を追道せまくて而も敵の行先難所なる山路まで かさより落しかけて透間もなく射落し切伏る間敵一度も返し不得只我先にとぞ落行ける。さるまゐ手を負こうる者は其儘人馬に被踏殺馬に離たる者は引ひて血多腹を切るもあり。大勢の死骸谷を埋溝をうづめて寄手の為に道平らかなり。弥輪宝の山谷を平らぐるん異たるまゐ京都に将軍三井寺に軍始まりしうと聞えて後馬煙天に覆ふて見へけるまゐ御方如何様負軍したりと覚ゆるぞ急ぎ勢を遣わせとて三條河原に打出先ず勢池へとぞせまりける。かくる所に栗田口より馬煙りを立て四五万騎ぐ程ひと崩まて不崩まて引来るうんと見まゐ三井寺へ向ひ四國西国の軍勢どもなり実に皆手痛く戦ひしと見えて。薄手負ぬ者もなく澄の袖塊の吹返しに矢三筋四筋折うけぬ人もなりけるまゐ陣うに是を休ませ敵寄来らゐ荒手を以て切崩さんと待うけうり。大将左中将義貞は國司中納言顕家卿へ後詰仕のへと申遣はさんしるども。顕家卿味方疲まて上少くの勝に乗て責上り敵の荒手の大勢に懸合ん事別に替る術なくては如何なりとて。伊達信夫の国の共を引つまて坂本へ引くしのひまなり。義貞思ひ立る事なるまゐ三万余騎を三手に分て都へ進む。一手とは将軍塚の上へあげ。一手とは真如堂の前より出し。手法勝寺と浄に當て二条河原へ出して相図の烟りとぞ被挙ける。自身は花頂山に打上て敵の陣を

見復しめくゝ上ハ紅の森より下ハ七条河原まで。馬の三頭よ手綱を打
うけ。鎧の袖ゝ袖を重ねゝ。東西南北四十餘町ゞ間進を立る斗り此
地も見えぞ身と峠て打囲ミゝ。義貞朝臣弓杖ゝすゞゝ下知せゝき
るゝ敵の勢よ味方を合をれゝ大海の一滴九牛ゞ一毛なる。只尋常の如
くよ軍をせば勝利を難得相互よ面を知ゝられゝる侍共五十騎ばく
手を分て笠符をとり捨旗を巻て敵の中へ紛き入此彼よ叩く暫く可
相待将軍塚へ上せゝる者共已よ軍を始むと見ゝ此陣より兵を進て可
令闘其時よ至て御辺達の前後左右よ旗を指上て。馬の足を静めぞし
て前よ在ゝとせゝ後へ廻つて。七縦八横よ乱く
敵よ懸る程なゝゝ敵の大勢ハ却て御方の勢よ見へゝ。円士対ををゝる乱
きゝく退くゝ尊氏此二ツの内を不可出と。韓信ゞ方すの謀を被申しゝぞ
諸大将の中より各遅兵五十騎をぞ勝り出して。二千余騎各一様よ中

黒の旗を巻て紋を隠し笠印を取て袖の下よ収め三井寺より引おゝれ
ゝる勢の真根をゝて。京勢の中へぞ馳加りゝる。此時正成ハ義貞三萬
余騎まで都へ責上り被申しと聞て大よ驚き急ぎ軍使を立て唯支
なく引くゝされゝ。味方ハ既よ疲まてゝる敵ハ大勢の荒手よいゝゝ危くいと
申遣しゝるよ義貞頭家卿よすげゝる返事せゝまてゝる事を無本意
思けまゝ楠殿も疾く後陣よ續ざめくゝと返事して引帰さまるまゝ。
正成ハいゝふと仰天し忠頭長年よ向て申されゝゝハ新田殿ふハ物の怪
の着て狂ひ申さゝゝと覚へゝ。今よ見ゝ人負軍して引帰さまを申べし傍も
御存知の前ふハ足利の勢ハ八十万よ余ま。味方ハ疲まてゝる兵三万よハ
不過敵ハ荒手ゝして大勢なゝ味方ハ無勢まして疲まてゝる。敵ハ備へ法
の如ふて乱まぞ味方ハ北るを追ふて半ば軍を乱を。豈勝を取の利あ
らんや但し敵よ義貞程勝まてゝる大将なゝ是味方一ツの取得なゝ侍し

深き謀をめぐらして戰ひのいざされば必定軍に負るべしいざゝせの人旁く
義貞の敗軍を救ふべしとて忠顯卿正成長俊の三將即時に坂本を立
て大津左右の山に射手を分て陣を扣へ申されぬ楠は三千余騎を三手
に分て山科の辺に陣取り數百人の射手を山の腰に立て備を堅め
長俊は三百余騎にて栗田山の此方なる日の岡に陣をとる正成長俊が勢
の餘り少く見ゆる程に御陣を山科に御扣へなれば某昏て栗田口に進と
いざしと申遣らるゝに長俊憤激して手勢少しとて何条楠殿より引下る
事はなるまじく候某先陣を仕はんと申されぬ楠已事を不得從臣志
貴左衛門に三百余騎を差添て長俊をたすけ自も栗田口に陣を進
め黨者三十人軍使二十人召連て蹴上に進て義貞の陣へ軍使を立
る支櫛の齒を引ぐ如く敵大軍にて戰ひ難義の由聞えらるゝに二十人の
軍使を召具して義貞の陣に至る義貞楠を見て世に嬉しゝ物語せ

らるゝに見の人尊氏大勢を只一備にて軍を不分は愚將の大軍を施
むと云事のいはれ尊氏の支にてはいかん正成答へて申さんに尊氏の軍
立拙ふして見苦敷に敵を足輕にて呼出して唯懸の人軍に治定勝なるべし
但し此御陣七に分られぬ多く敵は唯一に成ていはれ御方は三手に分
て進せのゝべし敵の勢を分申さん先よりそとあらるゝに義貞覺示と
矣ひいざとよ其術を以て敵の中へ千余人の味方を入置たり相図の刻限
定ありと申さるゝに正成心能氣に打笑ふて最堅き軍に勝なれば必ず
京に足を止めなん今日速に坂本へ御帰りあれ栗田口にて待參らせいとて
暇をこふて義助の陣に至り又真如堂の前なる由良長濱の陣に至り
うざと敵に笠符菊水の旗を見せて山科にぞ帰らるゝ足利勢かさ
符菊水の旗を見て捕も来りくるぞ今日の軍は大事なりとぞ申ける
尊氏も是を見て正成来て下知をすると覺たり如何なる計ひあらん暫

く静つゝ敵の術を見よ麁忽に進む事なかるべしと下知せられける

奇兵計義貞破足利兵　尊氏敗軍走冊波路

尊氏八旗ありとハ思ひ寄らぬに宗徒のものどもに向て被下知けるハ新田ハいつも平場の懸りをこそ好むと聞しに山を後ふあて備を立られ如何様小勢の程を敵に見せじと思へるものなり。将軍塚の上に取あがりる敵を置ていつまでも安閑と詠め居るべき彼に馳向て追散せと申されハ越後守畏て武蔵相模の勢六千餘騎を率して双林寺と中霊山とより二手に成てぞ寄りける。此所に八脇屋右衛門佐堀口美濃守大館左馬助結城上野入道以下三千餘騎を備へられける其中より逸物の射手六百余人を勝て馬より下し小松の陰と小楯に取てさらに引つめ散々に射させ峻しき山を上り勇てる武蔵相模の軍兵ども物の具を被徹て矢庭に伏馬を被射て次列落され進を兼て見へける所を得かしこしとて三千餘騎抜つれて大山の崩るゝが如く真倒に落しかけ〻りけるぞ。

師泰ゲ兵六千余騎一足をもためず五条河原へ颯と引退く。あるまそ杉本判官曽我二郎左衛門も被討にけり。官軍ひさと長追せず猶東山を後に當て勢の程を見せざりける。さるぞ搦手より軍始りけるぞ大手是を受て時を作る官軍二萬餘騎と将軍の八十万騎と入替〻〻攻戦ふ有さま八飫戟霜の如く巫嶺地に暗く殺氣天を衝きて打合鍔音矢喚びの声も百千の雷の如く漢楚八ケ年の戦ひを一時に集め呉越三十度の軍を百倍になるとも猶是程ハ不可過とぞ見えける。寄手ハ小勢なれ共皆心を一つにして懸る時ハ一度に懸て敵を追まくり引時ハ手負を中に立て静に引京勢ハ大勢なれども人の心不調して懸時も不揃引時も不助おのゝひく心くに闘ひけるぞ。午の刻より酉の終まで六十餘度の戦ひに寄手の官軍度毎に勝に乗ぬと云事なしぞ。さるども将軍方大勢

たるべき敵とも勢も不透迦ども遠引せど只一所よのこる人居さりきる処よ最初より紛さわりつる新田の勢ども思ひもよらぬ将軍の前後左右よ中黒の旗とさ〻上て亂れ合て戦ひけるべ何まを敵何まを御方とも弁へ難く東西南北よ呼叫んで只同士打をするより外のあとそなりけり。将軍を始め吉良石堂高上杉の人〻是を見て味方の者共が敵と作合て後矢を射ると被思けるべ心と置合て高上杉の人〻ハ山寄をさして引退き将軍吉良石堂仁木細川の人〻ハ丹波路へ向て落られける。官軍いよ〻勝よ乗て短兵急よ拉〻ぐ将軍今ハ迦る所迄と被思けるも。梅津桂川辺まてハ煌の草摺畳みなげて腰の刀を抜んとせしること三ヶ度よ及ぶさまども将軍の運や強かりけん日既よくれるを見て追手桂川より引返しけるべ将軍も且く松尾葉室の間よ引へく梅酸の渇をぞ休めまける。爰ふ細川卿律師定禅四國の兵ども向て彼申ける軍の勝負ハ時の運よる支なるべ強ち不恥なるまねども今日の負ハ三井寺の合戦より事始りつる間我等が瑕瑾人の嘲りを遁ぜられぬ熊と他の勢を不受して花々なる一軍して天下の人口を塞がぬやと思ふるり。推量をるに新田が勢ハ終日の合戦よ草伏て寝よ應ぜるとなるは其外の敵ども京白川の財宝よ目を懸て一所よ在べかるべ。其上赤松兎角守僅の勢よて下松よ扣へて在つるを無代よ討せたるも口惜かるべ〻いざや殿原〻ち蓮華野より北白川へ打越て赤松が勢と一手よ成て新田が勢を一當ばかり見んと被申けるべ藤橘伴の者ども子細なきぞとぞ同じける。定禅不斜悦んでうきと将軍よも知らさぬ伊豫濱岐の勢の中より一千餘騎を勝て。北野の後より上賀茂を経て濱〻よ北白川へぞ廻りける

定禅智撃義貞油断

名和楠救義貞破定禅

去程ニ定禅ハ紀の辺ニて千餘騎の勢を十方ニ分て下松藪里静原松ケ崎中加茂三十余ケ所ニ火をかけて爰をゞ打捨て一条二条の間ニて三所ニ鬨を挙又所〻ニ火を放て責立〻〻ふ案の如く律師定禅の推量ニ遠ゝぞ宮軍京中の民屋追捕し酒食財宝を貪り居〻ける。此鬨の声火の手ニ驚きもとゞ敵の大勢取て返〻たりと云程ニてあま。驚き騒ぎて已ゞ陣所を失ひ主ハ其従者を失ひ士卒ハ其主とあらぐ散〻ニ成て落行けるを此と見て楠ハ山科ニ木沢大和守を軍使として敵を破りのゞ早く引引〻く是ニて待合せゞ〻京中ニ在陣しゆゞ敵ニ〻智謀の者ある時ハ御方ニ大勢寄あるべ〻と告〻けふ義貞ハ散〻ニ打なされ義助と一手ニ成て衛八十騎余りの勢ニて一条の辺ニ旗打立て御方の勢を集め御座しける。直ニ定禅赤松一手と成て三千余騎義貞と見るより引包んで討んとし義貞義助迎も逃ぬ所と覚ゆ〻八十余騎ニて相懸ニ懸て己ニ討死せんと思ふ〻を。楠ゞ軍使木沢大和守馬より飛下り義貞の馬の前ニ立塞て是ハ如何なる事のぞ大将の自ら戦ひの所ニ〻ゞ只引めんと申て義貞の馬の口と引て三條河原をさして落行〻ふ敵手しげく追ゞて十分危ふく見え〻ける。大舘左近二条の町口ニて取て返して討死し由良新左衛門猶子二郎左衛門ハ三条の橋口ニて敵三騎切伏て其身も爰ニて討死ニ〻。舟田入道ハ義貞の跡ニ引下て敵を防ぎ天神力士の荒〻る如く取て返して責合せ引返して懸合終ニ主従三騎と成て栗田口の辺ニて討死ニ〻。定禅ハ後陣ニ續き赤松ハ前ニ進て義貞義助と何國までも追詰て討とらんと烈〻く跡を付て〻。義貞ハ舟田ゞ討死を聞て大ニ歎き舟田を討せて何面目有て存命んと我もとゞふ討死すべ〻と。敵の中へ懸入申されゝを十六騎の勇士取て返して敵を追ち〻

定禪が智戦
義貞敗軍の圖

といく引退く。正成敗軍のよしを聞て去べくもなくて三千餘騎の内千五百騎を勝て京都の方へ馳らるる。栗田口の辺ふて長濱ゞ三千騎斗りふて引来るにあひ義貞の支を尋ひくるべ不知と申を扱ひ対面をしひけん無心元とて長濱と打つれ立栗田口まて長手と一手ふ成て進と申さまるれば義貞義助二十騎斗りまて取て返しく自戦ふて引来り申されけるに長年是を見て三百騎赤松ゞ勢の中ふ懸入るべ正成五百餘騎を分て二陣ふ進を備を不乱切たつるふぞ。定禅赤松大ふ乱と散ふ追まくれ立足もなく北退さるゞ。赤松七郎衣笠与八別所但馬。備上十兵衛宇野新能登守。を始め宗徒の輩被討ふ。義貞是ふ力を得て又取て返さんと仕ひ引ひくと申されるべ栗田口ふ旗打立てひく申されける楠ゞ五百余騎長俊ゞ三百余騎と備を乱して追てくるべ定禅赤松ゞ軍勢多敷くて

残り少るふ成ふる。義貞も煌ふ立処の矢九筋義助も数ヶ所手を被負くるゞ正成の弟申〻所少〻も不遠と感ゞ悔を申されるゞ。長年今ハ長追無用引返さんと渋をるる正成已前尊氏が追立らるゝ兵今都へいくもかくもと思へる。御方も敗て都の四方ふ散乱て此所へ帰らざる者幾等も有ふん。今一追ふて御方と助けんと弟申くるべ長俊尤よりとて又迎行敵を追ひけて東山を後ふ當て暫らく陣をとるるふ。果して此彼より落集る官軍数多あり夜も漸く更ゞるべ正成長俊備を引く帰らるる義貞義助も四千騎斗りふ成て栗田口ふ旗打立てひく申されるゞ夫より東坂本へ引くさんとて山科を通られけるに旗打立叢重ふ扣へる兵あり義貞誰が兵らんと見申されけるふ是楠正成の勢と義貞感ゞて楠ハ實ふ謀の深き人なりと弟申るゞ。去ば義貞謀を以て一挙ふ尊氏を退散せしむとゝども勝利を慎

〻まざる故に定禅が為に敗られぬる。義貞敵を追退けて後正成の謀に従ひ東坂本へ引退きぬ。不然む東山の在家遠き地に陣をとり軍勢を堅く備へ法令厳密なる時は定禅謀を行ふ事不能して却て定禅赤松を擒にもせむずべき事なり。然るに義貞の法令をゆるふして軍勢ども京白川に分散し財宝を奪ひ取敢て一処にあはざりける定禅その備なきを攻其不意に出べる智謀の程最宜し。誠に如此軍勢分散して陣整ふ事無所へ敵よせ来らば。如何なる猛将精士も豈禦ぐ支を得んや。義貞智謀たるべき船田を始として宗徒の諸将士卒を待せて最惜ぬ。定禅は二百騎斗を率て這〻のぶを東寺に陣を備へ赤松も一所に在なが。楠又寄来らんと恐まるゐ不寄して東坂本へ引べうと聞えなぶ。頃て早馬を立て此由を将軍へ注進を尊氏これを聞て心を安んず京都に帰り申されぬ。依之山陽山陰両道へ落行る兵ども皆又京都へ引帰〻なが。西の岡久我畷の野伏ども馬物の具を取らまて見苦しき入洛をなす。中なる。又摂及へ落る輩は楠が所々の城より足軽の兵を百騎二百騎出して討とりなぶ辛ふして其場を遁れ散〻の躰にて都へぞ帰りなる。嗚呼義貞朝臣は僅に三万騎の勢を以て将軍の八十万騎を懸ちし。律師定禅は千騎に足らざる勢を以て官軍の二万余騎を追落る彼は項王が勇を心とし。是は張良が謀を旨とし〻智勇何まても取〻の人傑なりと甚頃の人申なが。就中正成が智謀をなまてしの事の遠はざりと軍に一度も不覚をとらざりしは舌を巻て恐まるる

評に曰義貞軍に打勝るべ本の東山まで引退きて陣をなるべかく見苦しき事はあるまじきに古の兵法に将の軍を發るに富貴の里に陣をる時は士卒軍の法を破るものなり

如何ゑ下知をまこと下〻の兵諸財ゑ目とゞけてその里ゑ乱入をるとゝめく
是敵ゑ対峙の場なる故ゑ富貴の里ゑ陣を不成とゝなり義貞の兵東國ゑ
下て敗〻都と落されく敗るゝまゝ皆貪ゑ苦しむ者のゝなり何ぞ財を
貪らざらんや義貞此理とゝなりなるゝ斯さなるき負をしたる支不覚く
捕是と知く軍ゑ勝めるゝ坂本へ帰りめんと謂まゝ是なる將なるゝの
武のゝちとよく心得ぞんを不覚の負あるゝ実ゑ心得べきことなるゝ
傳曰越後守師泰六千余騎を随へく東山ゑ向ふ時義貞兵を不出あゝ
軽を以て是を射立てゝらひ北申なる師泰も五十人百人を出して
新田と呼引出さんとを義貞ハ師泰と御方の陣近く呼引寄て弓の
兵百余騎を勝く要害を前ゑ當て是と対さゝめ乱まん所を懸んとを
されゝ互ゑ寄ゞ懸〻まゝ沢足軽の懸合六十余度ゑ及べり然まども義
貞の兵手の郎従をれゝ下知を守く進を退く師泰ゞ兵ハ集り勢な

まゝは下知を不受師泰て戦をゞを負ぬ。相図の刻限ゑなりなまゝゝ
義貞花頂山ゑ火を挙即時ゑ太鼓と打て鬨の声と発を尊氏の勢な
まゝをゞと驚き宗徒の人〻ハ楠の術の有ると陣中乱まを騒で見まゝ
敵のかさ符羅御方の陣中ゑ充満へり去ハ足利勢ハ士対して上
と下へとゝ久〻ゑなるゑ義貞直ゑ尊氏の先陣師直ゞ扣へる陣へ懸
入申されまゝ本文の如く敗〻なるゝ義貞の謀最深〻尊氏此
謀ゑかゝ〻ハ智の足ざる所ゝて丹波へと志く引まるゝ其故ハ摂津
の國ゑハ正成の城数ケ所あまゝなる義助一手の兵とゝく尊氏を追
かけまゝ桂川まて細川清氏取てく〻追くる敵と待うけ静ゞ
〻つくまくり立敵小〻対とりなまゝ爰ゞて義助も追捨て引帰しぬ
又梅律の迎まて尊氏馬ゑ離まて自害せんとせ〻まを都築八郎
左衛門馬より飛下り尊氏と乗まの〻せ我身ハ歩立ゞなり尊氏ち

馬の口をとりて為るとぞ

官軍三将取圍寄京都　神楽岡金村放手突翁

斯る所に去年十二月に一ノ宮関東へ御下向ありし時搦手にて東山道より
鍾倉に御下り有し。大智院宮彈正尹宮竹の下宮根の合戦に相図相
遠して逢せのいざりしらども甲斐信濃上野下野の勢ども馳参りあつ
御勢雲霞のごとくに成て鍾倉へ入らせのこ此あて事の様と問へ新田義
貞竹の下合戦に打負て引返を尊氏逃るを追ふく北上洛ぬ其後奥
及の國司顕家卿又尊氏の跡と追て北責上ぬとぞ申る。さてべ何様道
もそも新田殿留らべ合戦有べ可逗留様なりとて公家に洞院左衛
門督実世持明院右衛門督入道信濃国司堀川中納言園中将基隆二
条少将為次武士に小嶋津上野入道門跡後前司大友猿子の一黨落合
の一族相場石谷頻瀬伊木津志中村村上源氏仁科高梨志賀真壁是

等を宗徒の者として都合其勢二万余騎正月九日の晩景に東坂本に
ぞ着ぬる。官軍弥勢を得て翌日も頻く京都へ寄んと議しるる。
打續き悪日なる上除りに強く乗しる馬どもるれば皆癈く更に働
き得ざりける間兎に角に延引して今度の合戦は二十三日と北定る。然
るに新田殿先陣と申されしを洞院左衛門督の御勢は荒手なるべ先
陣と申され顕家の卿は先陣人に可被越に非ずと宣ひしを楠祐覚を
治らひて兎角に申るざめり。去べ新田殿東へと申されば北畠殿は西
へと宣ひ如是まで弓矢の事心るまぢきものと正成も獨言とぞ申さ
まる。三将の義三ツに分まて已に納るべきとも見えざれば上洛に達
しぬる。主上聞召て正成能様に斗ふべしとの勅定なり。依之楠又祐
覚に後ぞ諸将を集めて評定しに正成勅定の趣を申て取斗らひる
べ。前後の陣と争ひに及るべ三将分れて。大津。赤山。今道。三ツ

の道より向ひの追手は大津道まで先陣たるべし。赤山今道は搦手まで
同事たるべし。別は鹿ゲ谷より北向い将は引下つゝ緒方戦ひ半ばなら
んぞる所へ寄て直は敵の中へうけ入めべ三将圍を取めとてくぐをと
らせ〳〵は何まても家の子二人出て圍を取しゝ頭家卿は大津より大手
の圍搦手赤山は泗院鹿ゲ谷は新田なり。結城九郎。楠判官。名和伯耆
守べ山徒の御方と一手は成て神楽岡は城を構へて籠りける宇都宮
公綱と責よとて山徒は平場の懸合騎馬は懸立らまてに叶まじ城を責
んは山谷の歩行は習ひて益さらんと思慮仕りける。楠が心の内こそ賢
こなれ已は其日は成ぬまぬ暫くあるも人馬を休めん為は霄より楠結城
伯耆。三千餘騎は西坂と下り下松は陣を取頭家卿は二万余騎は大
津を経て山科は陣を取泗院左衛門督も二万余騎は赤山は陣とり山
徒は二万余騎は龍華越は廻て鹿ゲ谷へ陣をとる。新田左兵衛督兄弟

は二万餘騎の勢を卒〳〵今道より北白川は陣をとる。大手搦手都合
十万三千餘騎皆霄より陣を取寄たまとも。敵は志〳〵せじと鮠と
篝火を焼ざりける。合戦は明日辰の刻と社定りけると機早る若大衆
ども武士は先をせらまじとや思ひけん。まだ卯の刻の始は神楽岡へ
ぞ寄しける。此岡は宇都宮紀清両黨城郭を構て居こりけるされば
無左右寄付く可責様もあるざりけるを。助注紀祐覚が門宿ども三百
余人一番は木戸口は着く。屏を阻て闘ひけるが馬櫓より大石数多投
懸て引退く所は南岸の圓宗院が門宿ども五百余人入替てそせめ
こりける。是も城中は名誉の精兵ども多けれまじ走り廻て射ける。
多く物の具を徹されて叶じとや思ひけん皆持楯の陰は隠まて荒
手替まとぞ招きける。爰は妙観院の因幡竪者全村と云三塔名誉の
悪僧有薙の上は大荒目の澄と重て備前の長刀のものさざりは菖蒲

肉幡豎者
神樂岡ゟ
手突の
箭仆
放る圖

開ちるを小服に挟む箙の太さ尋常の人の蟇目かぶゝふをる程ちるに三年竹をめぎ付に押削る。長舩打の五分鑿ひどちるを名本まで中子を打徹ゝ〳〵くねぢをけ。沓巻の上と琴のいとを以て巻て三十六差たるを。森の如くに負なゝ熊と弓をば不持是ハ手突にせんが為く〳〵。切岸の面に二王立に〳〵く名乗けるハ先年三井寺の合戦の張本に召て越後国へ被流〳〵し妙観院の高因幡全村と云ハ我と〳〵。城中の人〳〵此矢一ツ進らせ〳〵ん受て御覧ゐと云まゝに上差一筋抽出て櫓の小間を手突ゐぞ突〳〵る此矢不限小間の陰に立さり〳〵る。澄武者のせんぐんの板より後の總角著の金りの迫裏表二重を徹して矢先二寸引り出〳〵る程に。其兵櫓より落て二言と不言死に〳〵り是を見る敵どもあなおびたゞ凡夫の熊に非ぞと。おゞて色めき〳〵る処へ禮智坊。獲聖院の若者ども千余人抜つれ責入〳〵る間。宇都宮不意を討れて遂に神楽岡と落て二条の手にぞ馳加ゝり〳〵る是よりしてぞ人皆全村を手突の因幡と名付〳〵されば山法師ども鹿ヶ谷より寄せて神楽岡の城と責〳〵り聞え〳〵れば将軍頓て後攻とせんとて今川細川の一族に三万余騎をさ〳〵副て紀遣〳〵る城いまや被責落敵入替り〳〵れば後攻の勢も徒らに京中へぞひき帰り〳〵る